
出会いと別れの物語 ～ 1 ～

時導離紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出会いと別れの物語〜1〜

【Nコード】

N0495A

【作者名】

時導離紅

【あらすじ】

昔であつた吟遊詩人の青年に会うために、ルカは人間に転生した。そして一つの村にある森の中。湖の辺でルカはその青年と再会する。だが青年はルカの手を振り払った。次の日その場所へもう一度行き物語をつむぐと、銀色の狼達が現れて――？

再開（前書き）

内容のスピードがばらばらです。

笑って許してくれる人はお読みください。

スピードがばらばらなのは読みにくいからいやだという人は、お読みにはならないほうがよろしいかと。

尚、最終話に近づくほどに流血の描写が出る可能性があります。苦手な方は読むのはおよしになられたほうがいいとおもいます。

再開

町でたまに見かけた、吟遊詩人の男の人。

その人は、いつも不思議な唄を歌って聞かせてくれた。けど、お上がその人を殺してしまった。

死神になった少女は、その人の魂を探すために、人間に転生した。

小さなころ。

その吟遊詩人の青年に、一つの物語を教えてもらった。

『もしも道がわからなくなったら、この物語を歌いなさい。そうすれば、かならず助けに行きますよ』

青年はそういつて、いなくなってしまった。

少女の目の前で、お上に殺されたのだ。

少女はそれから何年も後に、自殺した。

その罪を背負って今一度生きると、死神の長に言われ、記憶を持ったまま、少女は人間に転生してしまったというわけだ。

少女の名前はルカ。

ルカは、とりあえずということでその吟遊詩人の青年を探すことにした。

近場の町で宿を取り、森の中の湖で（宿の人に場所を聞いた）歌を歌う。

青年から教えてもらった歌だ。

——これは、小さな村に存在する、一つの大きな物語です。

昔々。とある山の頂上に、一軒のあばら家が建てられていました。

そのあばら家には、二人の青年が住んでいました。

二人というのは、正しくないでしょう。

一人の青年と、その青年が造ったカラクリ人形が、一緒に暮らしていました。

青年とカラクリ人形のキラは、仲良く一緒にいました。いつでも、一緒にいました。

ある日、青年はキラの体の動きが鈍くなっているのに気がつきました。

青年がキラの体の異変に気づいたときにはもう手が付けられない状態になっていて、キラは　ベッドの上ですごすことになりました。

青年はキラを捨てることもせず、大切に大切に。最後の最後まで一緒にいました。

そして、キラは動かなくなりました。

青年はその日から表情と感情をなくしてしまいました。

そして、青年はカラクリ人形のキラと一緒に、あばら家の中で朽ち果てていきました。

いまでもそのあばら家は存在しています。

けれど、誰も中には入ってはいけません。

青年が、カラクリ人形のキラを人間にして、一緒に暮らしているからです。

そのあばら家で、二人は幸せに過ごしているのでしょうか――？

これは、小さな村に存在する大きな一つの物語。

世界に捨てられた。認められなかった青年と、その青年が作った、カラクリ人形にもなれ　ず、人間にもなりきれない青年の。

二人の密かな、小さな小さな。それでも大きな物語――

物語が終わると、森の空気が変わった。

ざわり、と風がル力を包む。

木々がしなり、いやな音を立てる。

思わずル力は耳をふさいだ。

ガサツと、音がした。

音のしたほうを向くと、そこには銀色の髪 of 青年が、陽炎のように立っていた。

「お兄さん！」

ルカは、その青年が物語を覚えてくれた吟遊詩人の青年だと思った。

一歩づつ、ルカは青年に近づいていく。

ルカの右手が青年の右手をつかむと――

「きゃっ」

青年はルカの手を振り払った。

「なんで……？ お兄さん……」

驚きと悲しみが同時に押し寄せてきた。

ルカは一歩、一歩と後退り、思わず零した涙をぬぐうことすらせず、そのまま森を走り去った。

ルカの姿が見えなくなると、青年はルカがつかんだ右手を左手で握った。

「……これでよかったのか……？」

青年はそれだけつぶやくと、湖から姿を消した。

次の日、ルカはもう一度湖へ向かった。

もしかしたらもう一度、会えるかもしれないのだ。

ルカは湖で、昨日と同じ物語を口ずさんだ。
がさつと物音がした。

「お兄さん?!」

ルカが振り向くと、そこにいたのは青年ではなく銀色の毛並みの狼だった。

『立ち去れ、小娘』

狼はいった。

「な……狼が……話した……？」

ルカは驚きで両目を開いた。

『死にたくなければ早くここから立ち去れ。でなければ我はお前を喰う』

狼は言った。

『あたりを見てみよ』

周りを見てみれば、そこには森の動物たちだろう。たくさんの動物が敵意を持ってルカを見ていた。

『志半ばで死にたくはないだろう？我も昔は人だった身。少しぐらいの慈悲をかけてやってもよい』

確かに、狼の言うとおり、志半ばで死ぬのはいやだった。

どちらかといえばもう少し長く生きたい。

見たことが無いものや、知らないものがたくさんあるだろう。

ほしい物だつてたくさんある。

それらを手に入れられないままに死ぬなど、ルカには到底いやだった。

だが、きつと今森を出て行けば、二度と。森にはいれてもらえないだろう。

それだけはいやだった。せつかくの手がかりなのだ。

「いやです。出て行きません。出て行くくらいなら、死んだほうがマシです！」

『娘！長の気まぐれ一つで村の存続にかかわること！知つての無礼か！』

別の狼が、ルカに言った。

「知らない！そんなこと知らないわよ！でもね！私はお兄さんを探すために一生をかけたのよ！もう一度生きるチャンスを手に入れたのに！それを棒に振ってまでお兄さんを探すために一生懸命だったのに、あなたたちに文句言われてはいそーですかと出て行けるものですか！」

ルカは精一杯に虚勢を張った。

『貴様あ』

狼や動物たちがいつせいに怒りだす。

『まあまあ』

その中で、狩猟格なのだろう。先ほどの銀髪の狼が口を開いた。

『娘、名はなんと言っ？』

「ルカ」

突然の脈絡のない質問に驚きながらも、ルカは答えた。

『そうか。では、ルカ。我らの一言だけでは動かぬというのならば、我らも最終手段に出る。それでもよいのだな？』

暴力沙汰になるのだろうか……。

ルカの不安を打ち砕くように、狼達の後ろのほうから、あの吟遊詩人の青年が現れた。

「お兄さん！」

2に続く

再開（後書き）

はじめまして。時導離紅です。

ふっと思いついたので勢いで書いてしまつて……。
ぐだぐだした感じかなーと思つてるのですが……。

いかななものでしょうか……？

私はどちらかといえば小説よりも漫画が好きな子供で、小説家を目指そうとか書いてみようとか本の2、3年前まではまったく思つてなかつたのですが、とある小説を読んでから、小説家を目指したいなと思い、いろいろ書いていたのですが、ネット上で人によんで頂くのは初めてなので、「続きを読みたい」と思えるような作品を作つていきたいと思ひます。

よかつたら、感想を送ってください。

悪いところもよいところもズバズバいつてくれてかまいません。今後のためになりますから。

では、最後まで読んでくれた方にお礼を言います。

有り難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0495a/>

出会いと別れの物語 ~ 1 ~

2010年10月10日03時34分発行